

国語科におけるリテラシーの授業

－中学1年生の古典の授業から－

金子 直樹

2006年度から当校では「新サイエンスプログラム」と題して研究開発を行っている。過去3年間の「サイエンスプログラム」の発展型として、「リテラシー」をキーワードとする全校あげての研究開発である。国語科では従前から、教科の指導内容そのものが「リテラシー」を育成するものであるが、この機会に改めて「リテラシー」という考え方を軸にして授業を構成してみた。題材として取り上げる「古典」は、「サイエンス」や「リテラシー」とカタカナで表記される場合の語感とは表面上縁遠いものであるが、それだけにむしろ本質的なつながりを明らかにしてゆきたい。

以下は、第36回中・高等学校公開研究会で公開授業として実施したものの記録である。

1 はじめに－問題の所在－

国語科におけるリテラシーとは、テキストを正しく理解するという能力だけではない。テキストをそのように読み取る自己と、テキストの向こうにいる作者の対話を通して、自己の認識を更新し、深化してゆく力であると考え。また、「学習指導要領」では古典の指導について、「古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てる」（「第3指導計画の作成と内容の取り扱い」中の、1（4）イ）とあるが、古典を「遠い世界の面白いお話」として読むだけでなく、作者が問いかけている内容を明らかにして、それに対する生徒自身の回答を作りだしてゆくことによってこそ、現代に生きる生徒と時代を隔てた古典との間に交通する回路が成立するのであり、古典が親しみのあるものになると思われる。

本単元では、随筆（『徒然草』）・説話（『宇治拾遺物語』）を読むことを通して、その中に表わされている、人の「思い込み」や「意識のとらわれ」という心性を捉え、また、その表現の滑稽さや意外さを文章に即して具体的に読み取ることを通して、生徒が自身を相対化し自己認識を深めることを目指す。

2 単元計画

単元名：古典の学習を通して、現代に生きる意味を考える。

対象：2006年度中学1年生

単元目標：

- ①古典の文章に慣れ、語句の意味や内容を正確に理解する。
- ②人物や出来事についての描き方から作者の意図を正し

く読み取り、それに対して答えることで自らの考えを深める。

単元の評価規準：

「C読むこと」

①国語への関心・意欲・態度

・古典の文章に親しみ、内容を正確に読み取ろうとしたり、現代に生きる自分の問題として捉えようとしている。

②読む能力

・語句の意味や内容を、文章の展開に即して正確に理解している。

・人物や出来事についての描写の仕方に注意をすること、また、類似の内容の文章を比べ重ねて読むことで、作者の意図を正しく読み取っている。

・作者の示す問題に回答することを通して、自分自身に対する考えを深めている。

③言語についての知識・理解・技能

・古典に用いられている単語を、文脈に応じて理解している。

・歴史的仮名遣を正しく音読している。

授業展開と教材：全8時間

I 『徒然草』の「困った人」を読む。2.5時間

[教材]

・88段「ある者、道風が書ける和漢朗詠集とて持たりけるを」

・89段「奥山にねこまたといふものありて」

・52段「仁和寺なる法師、年よるまで石清水を拝まざりければ」

・236段「丹波に出雲といふ所あり」

[指導上の留意点]

・教材は、中学1年生という学年を考慮して、本文右

に全て口語訳を付したプリントを用意する。

- ・四段のそれぞれの内容・構成に注意して、兼好の描く人間像を理解する。
- ・初発の感想「勘違い」「思い込み」という大きな括りを出発点にして、各段間の類似の關係に注意して、「意識のとらわれ」のあり方を明らかにする。

II 『徒然草』の「ありがたき人」を読む。2.5時間

[教材]

- ・206段「徳大寺の故大臣殿、檢非違使の別当の時」
- ・134段「高倉院の法花堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふ者」

[指導上の留意点]

- ・前Iの学習をもとにして相違点をまとめ、筆者の主張を理解する。
- ・134段「なにがしの律師」に対する兼好の評価とその理由を正しく読み取ることから、「おのれを知る」ということの意味を考える。

III 『宇治拾遺物語』を読む。まとめ。3時間

[教材]

- ・104段「獵師、仏を射ること」
- ・菊池誠の文章（朝日新聞2006.9.21「科学批評室」）

[指導上の留意点]

- ・前I IIの学習をもとに、「意識のとらわれ」や「おのれを知る」者のそれぞれの表れ方を、説話の描写に即して具体的に読み取る。

[指導上の留意点]

- ・前I II IIIの学習をもとに、「意識のとらわれ」や「おのれを知る」ことの意味を生徒自身の問題として捉え、まとめる。
- ・「水の結晶」や「マイナスイオン」などのニセ科学に対する信仰・意識のとらわれを取り上げた文章を読み、前I II IIIの学習と合わせて生徒自身の問題として捉え、まとめる。

3 授業の実際－学習記録から－

実際の授業の様子や生徒の反応・到達度を、単元の流れに従って、生徒の「学習記録」やレポートの抜粋で示す。（引用部下線と※注記は、金子による。）

I 『徒然草』の「困った人」を読む。

学習記録 I

今回の授業では、主に236段と52段とを勉強して、内容を詳しく理解することができました。236段は聖海上人が出雲の社に参拝に行くと、獅子と狛犬が背を向けて後ろ向きに立っています。上人は、この変わった様子にすごく感激して涙を流しましたが、実はいたずら小僧の仕業だということでした。52段では仁和寺の法師が石

清水に一人で参拝に出かけて自慢そうに帰ってきましたが、実はふもとだけしか見ずに本殿にはたどり着いていなかったという話でした。

どちらの話にも「落ち」があっておもしろく読みましたが、授業を進めるにつれて「落ち」が共通していることが分かって一つ一つの理解が深まりました。また、前の時間に勉強した88段と89段との関係が気になってきました。四つの話に共通していることをまとめて、兼好が私たちに何を伝えたかったのかを考えて『徒然草』の学習を仕上げていきたいと思います。（A組H I）

※四段ともに平易な内容であり、失敗談として現代人にも共通する「親しみやすさ」があり、古典学習の導入によく用いられる章段である。しかし、その扱い方が「現代のわれわれと同じだ」という話題内容の読み取りに止まるのであれば、なにもわざわざ古文で苦勞して読む必要もあるまい。古典学習の導入にあたって、親しみ易さとか分かり易さということは重要ではあるが、読んで考えるまでもないということであれば、ただ古文を読んだという経験を積んだに過ぎない。それでは国語の学習として、また、古典に向き合う姿勢を育てるという点でも不十分であろう。

本單元では、中学1年生という古典導入期であるからこそ、「古典とは、読んで考えるものである」という学習の構えを作ることを目指した。

四段それぞれについて、話題の人物（誰が）と話題の内容（何をしたのか・どのようであるのか）とを要約させ、これらの段に共通する主題（筆者は何を言おうとしてこれらの話題を取り上げたのか）についてまとめさせた。導入時点では、四段に共通する内容・テーマ（「困った人」）について指導者から焦点化することはせず、各段をそれぞれについて話題の人物と内容とを整理する中で、共通項が存在することに生徒自身が気づくように仕向けた。複数の文章を重ね読みする中で、生徒自身が読みのテーマを発見する、ということである。

初発の感想で生徒の言葉としては「登場人物は勘違いしている」「落ちがある話になっている」というものでまとめられた。次の段階として、その「勘違い」や「落ち」の共通要素を求めるように思考を促した。上記の学習記録の記述は、そのことを指している。

また、「まとめ1」として、「これらの段に共通する主題（兼好は、何を言おうとしてこれらの話題を取り上げたのか）」について記述させ、結果はプリントにして生徒にフィードバックし、理解を深めるようにした。以下に、典型的な記述例を挙げる。

生徒のまとめ I-1

すべて話題の人物たちに共通しているのは、何かの勘

違いと思ひ込みだと思ふ。勘違いの理由は88段と236段では話の中心になっているものが高価だとか貴重なものだから、こうに違いないと自分で決め込んでしまっているからで、89段と52段では自分の勝手な思ひ込みと話題の中心のものについてよく知らなかった、よく話を聞かなかったからだと、私は思う。(B組MR)

生徒のまとめ I-2

私は四つの話のすべてが笑い話に思えました。話の最後にオチがついていたからです。でも、それは同時に、人間を厳しい目線でとらえているのだと思いました。四つの話すべてに、人間の情けなさがよく表わされているような気がします。だから、筆者の吉田兼好は、日頃の人間の行動を厳しい目線でとらえて、そしてそれを人間の情けなさがよく分かるように書いたのではないかと、思いました。(C組DC)

II 『徒然草』の「ありがたき人」を読む。

学習記録 II

兼好が『徒然草』を通して私たちに伝えたかったことは、人間の生き方だと思います。そう思ったのは、134段を理解してからでした。私は、初めは、自分の顔が醜いというだけで引きこもって人とつき合うことをしなくなった「なにがしの律師」を「困った人」だと思っていました。でも、兼好は「ありがたき」と言っていました。兼好がよいと言っている206段と134段の中心人物は、周りの人間に左右されることなく、自分をしっかり持っていたり、自分をしっかり分かっていました。「他人の意見に左右されたり、他人のことばかりをあれこれと推測して、本当の自分というものが分かっているのでは、真に物事がよく分かっているとは言えない。それは恥だ。」と兼好は言っています。兼好が私たちに伝えたかったのは、このような人間の生活についてだと思ひます。

(A組HS)

※前 I の学習のまとめをもとに、次の段階として対照的な「すばらしい人・ありがたい人」について読み、対比の軸を読み取らせた。I での重ね読みに加えて、II では対照的なものを重ね読みをすることによって、前 I の内容・位置づけが一層明確になってくることも効果的であると考える。

134段に関しては、読みの過程に仕掛けを設けた。まず「…と聞き侍りしこそ、ありがたくおぼえ侍りしか。」とある三昧僧の言動と兼好の評語までの部分を、「ありがたき」を空白にして読ませ、「兼好はなにがしの律師のどのような言動をどのように評価しているのか」を推測させた後で、後半を読ませることにした。

これはむしろ、正解を求めるための発問ではなく、前

I の学習でのまとめからの、大方の生徒の予想に反して兼好が「ありがたき」と評価している理由を正確に読み取り、考えを深めるための仕掛けである。また、134段には、特に後半に、芸談や老いをめぐる言及など、『徒然草』他段との関連から考察すべき難解な部分があるが、ここでは「おのれを知るを、物知れる人と言ふべし」という記述に焦点をあてて読解をさせた。上記の学習記録の記述は、そのことを指している

また、「まとめ 2」として、「兼好は『なにがしの律師』をどのように評価しているのか」、「兼好は人間の生き方についてどのように考えているのだろうか」というテーマについて記述させ、結果はプリントにして生徒にフィードバックし、理解を深めるようにした。以下に、典型的な記述例を挙げる。

生徒のまとめ II-1

徒然草は、もうずっと前に書かれたものなのに、今の私たちに向けて書かれているようで、納得できることが多い。兼好が困った人の例としてあげているのは、信じ込みすぎる人、人の話を聞かない人、つまり自分のことを知らない人。今でも、うわさに流されてしまったり、自分の思ひ込みだけで動いてしまっている人が多いと思う。私は、「徒然草」のいくつかの段を読んで、今と昔との考えに変わりはないなと思ひました。(B組TA)

生徒のまとめ II-2

兼好は、人間の生き方について、どのように考えているのだろうか。兼好は、すべての人間が、物事を論理的に考え、自分で判断し、生きていって欲しい、と考えていると僕は思う。困った人の例では、信じ込みすぎ、迷信にとらわれた人と、ガンコで人の話を聞いてない人がいたが、どちらも同じことだ。両方とも、自分でちゃんと物事を考える気が全くない。つまり、兼好の考えている人間の理想的な生き方とは、全然違う生き方をしている人だ。徒然草には、こういう困った人を乗せているが、そうでない人も多い。例えば206段の藤原実基の話では、周りのみんなが「怪異なことがおこった」とパニックになっている時に、実基は、実に論理的でもっともなことを言って、事件をうまくおさめた。134段のなにがしの律師は、自分のみにくさを知った後、ちゃんと本当の自分のことを考え、部屋にこもることにした。兼好はこういう生き方をする人が社会に増えることを望んでいると思う。(A組MT)

III 『宇治拾遺物語』を読む。

学習記録 III-1

私は、『宇治拾遺物語』を読む前は、「信じすぎることがいけないのだ」と思っていた。しかし『宇治拾遺物語』を読んで、それだけではないと分かった。獵師だっ

て、初めのうちは「仏」の来迎を信じていた。しかし聖と違って獵師は「仏」が本物ではないと見破っている。それは、獵師は自分が「経の向いている向きも分からない」ことを知っているからだ。獵師は、仏の教えに詳しいわけではなく、本物の仏であれば聖にだけ見えて獵師には見えないはずだから、獵師は怪しく思った。つまり獵師は、始めは「仏」を信じていたが、実際に「仏」の姿を見てからおかしいと考えるようになった。このように、「信じること」がいけないのではなく、「信じるだけで考えないこと」がいけないのだ。（A組OA）

学習記録Ⅲ-2

今回は『徒然草』よりさらに百年ほど前の話である『宇治拾遺物語』を勉強しました。主な登場人物は聖と獵師です。聖は何年も僧坊を出ることもなく修行をしており、獵師はそんな聖を尊敬していました。獵師は、尊敬する聖が「この夜ごろ普賢菩薩、象に乗りて見え給ふ。今宵とどまりて拝み給へ。」と言ったので僧坊にとどまり、その晩現われた菩薩を見て不審に思います。菩薩は経を修行する者の元へ現われるはずなのに、経の向いている方向も分からない自分の目に見えるはずがないと思い、弓矢で撃ってみると大きな狸だった、という話です。

私はこの話を読んで、『宇治拾遺物語』の作者の伝えなかったことは『徒然草』を書いた吉田兼好と同じなのではないかなあ、と思いました。聖は「困った人」たちの仲間だと思ったり、獵師は実基のように冷静な判断をした人として書かれています。先生は、「兼好も、昔の人に会ってみたいと思っていたのだろう。皆と同じだ。」と言っていました。私が兼好に会ってみたいと思ったのは、兼好の考え方に納得共感したからです。きっと兼好も、同じような気持で「見ぬ世の人を友とするぞこよなうなぐさむむぎなる」と書いたららうと思いました。（B組TY）

学習記録Ⅲ-3

聖がたとえすごい人でも、菩薩を信じすぎたからニセ者と見抜けなかったし、字の読めない獵師でも、自分をよく知っていてよく考えたからニセ者を見破ることができた。その事を理解した上で、現代の私たち自身についても考えてゆきました。私たちの現代では「科学」が発展しています。しかし「科学」ではない「ニセ科学」も広がっています。なぜ広がったのかというと、結果だけに飛びついてしまうからです。「科学」の本質である合理的な思考のプロセスが本当に求められていないからです。私たちは、「マイナスイオン」の知識もなく合理的に考えてもいないのに、「これって体にいいんだ」という結論だけを信じ込んでいます。これは、『宇治拾遺物語』の聖と同じ事ではないでしょうか。（A組TY）

※『宇治拾遺物語』の「獵師、仏を射ること」は、教科書「中学校国語1」（学校図書）所収の教材である。教科書では、「とらわれた心に突き立つ矢」という題名をと共に解説文を附して、読みの方向性・目当てを提示した内容となっている。今回のこの単元は、教科書の解説文にある読みの目当てを、前IⅡの学習として古典の学習内容そのものとして取り込んだものとして実施している。

また、難易度や学習者の負担を考慮した教科書では、部分的に粗筋説明を用いた内容となっているが、本単元では前IⅡと同様に口語訳を右に附した全文をプリントとして用いた。

「獵師、仏を射ること」は、聖と獵師（俗）との価値転換や、宗教的規範と人間の覚醒との問題など、様々な読みの切り口を持つ文章である。この単元では、前IⅡでの学習をふまえて、獵師が自分の目に見えたからこそ信じないという逆説を理解し、その逆説を支える獵師の自己認識のありようを、「おのれを知るを、物知れる人と言ふべし」という『徒然草』の記述に合わせて読み取ることを通して、現代の私たちの問題を考えることを目指した。上記学習記録Ⅲ-1、Ⅲ-2の記述は、そのことを指している。

Ⅲ-2にある「見ぬ世の人を友とするぞこよなうなぐさむむぎなる」という『徒然草』13段の文は、教科書「中学校国語1」にある古典学習全体への導入にあるものである。学習者がテキストを読み取るというだけでなく、読み手として書き手と対話するという古典学習の構えを表わしたものであり、生徒達はその枠組みを理解して学習に臨んでいることの表れである。

事前の単元計画では、教材は『徒然草』と『宇治拾遺物語』だけを予定していたが、ちょうど本単元を実施している時期に、新聞の科学記事として菊池誠の文章（朝日新聞2006.9.21「科学批評室」）が掲載された。水の結晶やマイナスイオン効果などの「ニセ科学」が蔓延する現象に関して、科学の結果だけでなく科学の考え方を伝える努力をしなければならないという、科学者の立場からの自戒の文章である。これは、科学者の立場のみならず、科学を志す・科学に関わろうとする私たちや生徒の立場からも読み取ることのできる文章であるので、補助教材として用いることにした。1600字程度の短い文章でもあるので、取り立てて読解の方向を示すことはせず、『徒然草』『宇治拾遺物語』の学習との関連としてよませた。上記学習記録Ⅲ-3の記述はそのことを指している。

4 まとめ—生徒のレポートから—

単元の終わりに、「まとめ3」として、「『徒然草』

や『宇治拾遺物語』の筆者が表わそうとしたことは、現代の私たちとどのように関わっているのか」というテーマでレポートを書かせた。生徒の到達度をレポートの抜粋で示す。(引用部下線は、金子による。)

生徒レポート①

「見ぬ世の人を友とする」この言葉の意味が、今回の授業を通して理解できたような気がする。今までは、「知らない時代の人の話に耳を傾ける」ことだと思っていたが、本当は「知らない時代の人と共通の話題について対話する」ことなのだ分かった。

七百年前に書かれた『徒然草』、八百年前に書かれた『宇治拾遺物語』、そして現代の私たち。時代も、物語の中心となるものも違うのに、共通して描かれているのは「人間の愚かしさと美德」である。いつの時代にも共通する、ということは、人間が進歩していない、ということを表わしているわけではない。どの時代にも、日本人の考える「価値ある言動」は変化することなく、大切にされるのだ、ということが表わされているのだと思う。様々な悩みや、戦乱や貧困など時代の逆境の中でも大切に貫かれてきた、「己を知り、冷静に判断することができる人をこそ、すばらしい人、物知れる人という」という魂が、『徒然草』や『宇治拾遺物語』を読む私たちの心にも宿っているのである。

この学習で自分の考えが発展したのは、「見ぬ世の人」を身近に感じることができたからだ。これから私たちが取らなければならない行動とは、このような思想や魂を、「未来の見ぬ世の人」に伝えることではないだろうか。(B組SR)

生徒レポート②

四月から国語で「古典」という分野を新しく習い始めた。最初は、固い文字ばかり並んでいて、意味の分からない難しいものだと思っていた。しかし、いろいろな話を読んでいく内に、内容をしっかりと理解できればどの話とも思わず笑ってしまったり、「なるほど」と納得させられるものだと思うようになった。

どうして千年も前の人が書いた話を、現代に生きる私たちがおもしろいと感じられるのだろうか。兼好の「ひとり灯のもとに文をひろげ、見ぬ世の人を友とすぞ、こよなうなぐさむわざなる」という言葉。私たちが見たり聞いたりした言葉は、全て誰かが書いたり話したりしたもので、その言葉の向こう側には必ず「人」がいる。私たちは文章や言葉を読むときに、無意識にその向川に「見ぬ世の人」を見つけ出し、その人と語り合っその人の息遣いを感じ取っている。それが何年も読み継がれ、現代でも、きっと未来でも親しまれるのは、いつの時代にも表われる人間のすばらしさであり、また、いつの時

代にも起こりうる人間の危なさであるからだろう。現代においても、様々な噂や情報が、かつてない程に存在している。私たちは、そのような「今」に流されずに、正しいことをしっかりと見極めていかなければならないが、ヒントは千年も前の人が言葉を通して教えてくれたものにある。それを大事にして、これからの未来に向けてずっと語り伝えてゆきたい。(A組IM)

生徒レポート③

今までは、「今の人と昔の人とは違う」「科学の発達した現在では、昔のような非科学的な考え方はしない」と思っていた僕だが、この学習を通して、考えが変化してきた。

『徒然草』では「困った人」と「すばらしい人」とが描かれている。「困った人」は、人の話を信じすぎたり信じなさすぎたり、どちらにしてもいいこととは言えない。それに対して「すばらしい人」は自分自身を知り、冷静に考えた人だ。『宇治拾遺物語』の獵師は「自分は経典のことは知らない」ということを知っていたから、宗教を信じてはいても狸に化かされることはなかった。それが現代では、「科学」にだまされている。だまされる対象が変わっただけだ。

「困った人」「すばらしい人」も、獵師も、そして現代の私たちも、共通してどちらの特性も持っているのが「人間」だ。どちらも否定できない人間の一面だと思う。どの時代にも両極の人間がおり、どちらになるのかということは自分で選べるのだろう。今も昔も、どちらの側の人間になるのかで、人生には少なからず影響があるだろう。どうせなら、冷静に物事を考えられる人になりたい。(A組MK)

生徒レポート④

『宇治拾遺物語』や「ニセ科学」をめぐる評論に共通していることは、根も葉もない噂を信じている人間がいる、ということであった。『宇治拾遺物語』に挙げられている「ニセ科学」とは、経を熱心に読む聖の前に白象に乗った仏が現われるというものであるが、現代人の目から見るといかにもウソっぽい話である。千年前の人間とはいえ、なぜこんなウソっぽい話をしていたのかというと、時代に伴う「仏ブーム」があったからではないだろうか。そして『宇治拾遺物語』のおもしろい所は、「仏ブーム」に水を差しているところだ。『宇治拾遺物語』の筆者は、「仏ブームとか言っているけれども、自分は未だ仏を見たこともなく、これはウソなのではないだろうか。」と考えていたのではないだろうか。とすると、『宇治拾遺物語』は当時の人々の考えをギョッとさせるような衝撃的な読み物ではなかっただろうか。

現在でも、「仏ブーム」に引けを取らない「イオンブーム」が一時期広まった。「マイナスイオンが体によい」

と言い出した人が誰だかは知らないけれども、その誰かの発言によって世間に広まった「イオンブーム」は、いろいろな商品が出回ることによって益々ヒートアップした。実は自分も「〇〇イオンウォーター」という清涼飲料水を「イオン」の三文字に引かれて買ってしまったことがある。今回、授業を通して改めて考えてみると、ブームに踊らされた被害者ではなく、一緒になってブームをあおり立てた加害者の一員、「困った人」や「聖」と同じであったのかもしれない。

いつの時代にも、根も葉もない話、非科学的な話が流行するのは当たり前のことなのかもしれない、と思う。そこで重要なのは、それをくい止めるのは私たちの頭なのだ、と思う。（B組SD）

5 国語科におけるリテラシー

以上の実践から、国語科におけるリテラシーを考える上では、「批評」による「異化」という視点が必要であると思われる。リテラシーの基礎として「読み書き」ということが重視されるのも、狭い実体験以外の抽象世界の存在を知ることによって、それまでの自己を捉え直して変革できるからである。

この「批評」の対象は、当然、他者ではない。学習活動としての、所与のテキストと向き合う読み手（生徒）という単純な図式から考えても、読むという活動、テキストと向き合うことによって、生徒自身が自己を見つめ「批評」するという姿勢を作り出すことである。前掲のレポート③・④で、現代の中学生である生徒が、自分自身のあり方をいつの時代にも共通する人間の一人として捉え直しているのは、その表れである。

また、「批評」の対象は、テキスト自体でもある。所与のものではあるが不変の聖典ではなく、授業展開Ⅰ・Ⅱで、単純な笑い話ではなく人間の生き方の表れであると生徒自身が読みのテーマを発見したように、読むという活動のなかで、生徒に新たな問題を提起するものとして捉え直されている。前掲のレポート①・②で「知らない時代の人」「言葉の向こう側にいる人」というように、テキストの語り手を想定できるようになったのもその表れである。

しかし、「読み手」自身や「テキスト」への「批評」による「異化」は、もたらされた結果である。結果は、一回であり、他のどんな教材を用いても、どのようでも作り出すことができる。国語科の授業でリテラシーを考える上では、このような結果としての表れ以上に、そのような読み方を志向すること、授業での読みの姿勢を作るという過程の方が重要である。その一回一回の読みを、「批評」による「異化」という読み方自体のレッスンとして生徒に定着させ、読むことの意味・役割を生

徒に意識付けるという授業過程が、リテラシー向上のために必要であるとする。また、古典を扱う場合には、現代文のような生徒の現実に直接関わる同時代性という利便がないだけに、却ってリテラシーの本質が表われやすいものであるとも考える。

6 おわりに

中学1年生で初めての古典の授業を行う上で、仮名遣いや単語の意味などの言語抵抗は、確かに大きな壁として存在する。しかし、その壁としての抵抗を意識するあまりに、古語単語の意味にばかりとらわれていては、古典は覚えるものでしかなく、読んで考えるためのものにはならないであろう。

今回の単元では、「読み」（音読）の練習だけは、繰り返して指導した。描写の指摘の場合でも、該当部分は常に「原文ではどう書いてあるか」を言わせ、板書にも要約や現代語ではなく原文を用いて板書をした。一方で、古語単語に関しては、覚えることは要求していない。中高一貫の当校にあっては、古語単語などの指導は時期を選びやすいという事情もあるが、それよりも、古典を読む構えを作ること、文章を読んで自ら考え、作者との対話を通して新たな自己を作りだしてゆく姿勢を育てることが重要であるとする。リテラシーの能力というものは、そこにあると考える。

今回の単元では、生徒達は『徒然草』『宇治集物語』という古典作品を通して作者と対話し、古典を現代によみがえらせて、自分自身の生活やものの見方を広く豊かにすることができた、と思われる。